

de Rham Homotopy による Open Variety の
Rational type の決定

東大 理学部 河野俊丈

X, Y を複体とし、 X と Y が有理ホモトピー同値であるとは、 $A_{PL}^*(X), A_{PL}^*(Y)$ の minimal model M_X, M_Y が \mathbb{Q} -differential graded algebra (\mathbb{Q} -d.g.a.) として同型であると定義する。ここで、 $A_{PL}^*(X)$ とは Sullivan の意味での X 上の \mathbb{Q} -polynomial forms の空間とする。([5]) X, Y が単連結の場合には、 $M_X \simeq M_Y$ より、 $\pi_1(X) \otimes \mathbb{Q} \simeq \pi_1(Y) \otimes \mathbb{Q}$ が真かれる。 X が compact Kähler 多様体であるときには、 M_X は X の有理コホモロジー環 $H^*(X, \mathbb{Q})$ の minimal model と同型であることが知られている ([1]) が、ここでは Morgan のスペクトル列 ([3]) を explicit に計算することによつて、Divisor の補集合の有理ホモトピー型を normal Euler 類の立場から論ずることにする。

1° $V \subseteq \text{smooth complex projective variety}$ とし
 D を divisor で normal crossing であるとする.

$$D^p = \{ x \in D \ ; \ \text{mult}_x D \geq p \} \quad (p \geq 1)$$

$$D^0 = V$$

とおいて V の filtration を定める. この filtration に
 共調な V の三角形分割をとる. D^p の正規近傍を N^p と

$$\nu : \tilde{D}^p \longrightarrow D^p$$

$$\tilde{\nu} : \tilde{N}^p \longrightarrow N^p$$

を normalization とする.

$$A_n = \bigoplus_{q-p=n} H^{q-2p}(\tilde{D}^p; \mathcal{E}_{\mathbb{Q}}^p) \quad (\mathcal{E}_{\mathbb{Q}}^p \text{ は divisor}$$

の順序に関する局所系) とおき

$A = \bigoplus_n A_n$ に次のように \mathbb{Q} -d.g.a. の構造
 を導入する.

$$(\text{積構造}) \quad H^{q-2p}(\tilde{D}^p; \mathcal{E}_{\mathbb{Q}}^p) \ni x$$

$$H^{q'-2p'}(\tilde{D}^{p'}; \mathcal{E}_{\mathbb{Q}}^{p'}) \ni x' \quad \text{と} \quad \wedge$$

x が ω ($N_{i_1} \cap \dots \cap N_{i_p}$ 上の form) x' が ω'

($N_{j_1} \cap \dots \cap N_{j_{p'}}$ 上の form) で実現されているとき

$$x \cdot x' = [i^* \omega \wedge j^* \omega'] \in H^{(q+q')-2(p+p')}(\tilde{D}^{p+p'}; \mathcal{E}_{\mathbb{Q}}^{p+p'})$$

ここで

$$\begin{array}{ccc} & & \xrightarrow{i} N_{i_1} \cap \dots \cap N_{i_p} \\ N_{i_1} \cap \dots \cap N_{i_p} \cap N_{j_1} \cap \dots \cap N_{j_{p'}} & & \\ & & \xrightarrow{j} N_{j_1} \cap \dots \cap N_{j_{p'}} \end{array}$$

ただし、 $(i_1, \dots, i_p) \cap (j_1, \dots, j_p) \neq \emptyset$ のときは、 $x \cdot x = 0$ とする。

(微分 d)

$$j: D_{i_1} \cap \dots \cap D_{i_p} \hookrightarrow D_{i_1} \overset{\mathbb{R}}{\cap} \dots \cap D_{i_p}$$

埋め込み j の管状近傍を $N_{\mathbb{R}}$, Thom class を $\tau_{\mathbb{R}}$ とする。次の図式を可換にする d を微分とする。

$$\begin{array}{ccc} H^{g-2p}(D_{i_1} \cap \dots \cap D_{i_p}) & \xrightarrow{d} & \bigoplus_{\mathbb{R}} H^{g-2p+2}(D_{i_1} \overset{\mathbb{R}}{\cap} \dots \cap D_{i_p}) \\ \downarrow \alpha & & \nearrow j^* \\ \bigoplus_{\mathbb{R}} H^{g-2p}(N_{\mathbb{R}}, N_{\mathbb{R}} - 0) & & \\ \downarrow \cong \text{exc.} & & \\ \bigoplus_{\mathbb{R}} H^{g-2p}(D_{i_1} \overset{\mathbb{R}}{\cap} \dots \cap D_{i_p}, D_{i_1} \cap \dots \cap D_{i_p}) & & \end{array}$$

$$\alpha(x) = \sum_{\mathbb{R}} (-1)^{g-2p} x \cup \tau_{\mathbb{R}}$$

以上により、 A は \mathbb{Q} -d.g.a. の構造をもつが、これについて、次の定理が成立する。

定理 1 $X = V - D$ とすると、 \mathbb{Q} -d.g.a A の minimal model は M_X と同型である。

この定理は、 X の有理ホモトピー型が

$$\{ H^{g-2p}(D_{i_1} \cap \dots \cap D_{i_p}; \mathbb{Q}) \}$$

という形の有理コホモロジー および normal Euler 類によって定まる degree 1 map によって決定されることを示している。

2° C, C' を \mathbb{P}^2 の既約曲線とし、定理 1 を非特異モデルについて適用すると、次の定理を得る。

定理 2 $\mathbb{P}^2 - C$ と $\mathbb{P}^2 - C'$ が有理ホモトピー同型であることは、次の i) ii) と同値である。

i) $\deg C = \deg C'$

ii) $\# \text{Sing } C = \# \text{Sing } C'$ で、それらの間に、局所解析的同型が存在する。

Zariski は、既約 6 次曲線 C で cusp 6 つの場合、

$$\pi_1(\mathbb{P}^2 - C) = \begin{cases} \mathbb{Z}_2 * \mathbb{Z}_3 & \dots\dots (1) \\ \mathbb{Z}_6 & \dots\dots (2) \end{cases}$$

(1) は、6 つの cusp が、ある conic 上にあるとき、(2) はそれ以外するとき。

となることを示しているが、この例では、定理 2 によって、両者は、有理ホモトピーの観点からは、区別できない。

3° 一般に、次のような状況を考える。

$\omega: X \rightarrow Y$ は、smooth projective variety の間の分岐被覆で、 C を critical set、 $D = \omega(C)$ とする。次の i) - iii) を仮定する。

i) C, D は normal crossing divisor である。

$$C^P = \omega^{-1}(D^P)$$

ii) $\omega|_{X-C}: X-C \rightarrow Y-D$ は、universal abelian covering.

iii) $\pi_1(Y-D)/[\pi_1(Y-D), \pi_1(Y-D)] = \mathbb{Z}_d$

$\mathbb{Q}\langle t \rangle$ を Laurent polynomial ring とし、 $\Lambda_d = \mathbb{Q}\langle t \rangle / (t^d - 1)$ とおく。 Λ_d は X に被覆変換として作用し、これによつて、 A_X は Λ_d -algebra の構造をもつ。 \mathbb{P}^2 内に既約曲線が与えられたとき、Zariski の意味の cyclic multiple plane を考えると、blowing up process によつて、上のような状況を作ることが、できる。基本群と、本質的に関連するのは、 A_X の degree 1 part

$$(A_X)_1 \cong \left(\bigoplus_j H^0(C_j) \right) \oplus H^1(X)$$

で、knot theory との類似で、 $(A_X)_1$ の Λ_d -module としての構造を、決定することを考えよう。

4° $C \subset \mathbb{P}^2$ を degree d の 既約曲線とし

$\text{Sing } C = \{P_1, P_2, \dots, P_R\}$ とする. 以下のように notation を定める.

$\mu(j)$: C の P_j における Milnor 数

S_j^3 ; P_j を中心とする十分小さな球面

$e_j^1, \dots, e_j^{\mu(j)}$; vanishing cycles

$\Phi_j(t)$; $K_j = C \cap S_j^3$ の Alexander polynomial

3° の条件を満たし $Y - D \cong \mathbb{P}^2 - C$ となるような 分岐被覆 $X \rightarrow Y$ をとり. このような X を \tilde{X}^d とかく

定義 $\Lambda_d^M \xrightarrow{\Phi} \Lambda_d^N \rightarrow H^1(\tilde{X}^d; \mathbb{Q}) \rightarrow 0$

を $H^1(\tilde{X}^d; \mathbb{Q})$ の Λ_d -module としての 1 つの presentation とする. Φ の $(N-j)$ 次小行列式で生成される Λ_d の ideal を $F_j(\tilde{X}^d)$ とかく. $F_j(\tilde{X}^d)$ の生成元 $f_j(t)$ を j -th Alexander polynomial とよぶ.

$$j \leq j' \text{ のとき } F_j(\tilde{X}^d) \supset F_{j'}(\tilde{X}^d) \\ f_j(t) \mid f_{j'}(t)$$

が成立している. この global な Alexander polynomial は local な Alexander polynomial $\{\Phi_k(t)\}_k$ と次のような関係をもつ.

定理 3i) $\mu = \mu(j)$ ならば:

$$f_{N-\mu}(t) \mid \phi_j(t) \quad \left(N = \sum_{j=1}^k \mu(j) \right)$$

ii) $\pi_1(\mathbb{P}^2 - C)$ が abelian 群ならば:

$$f(1)f(\xi_d) \cdots f(\xi_d^{d-1}) \neq 0 \quad (f(t) = f_0(t))$$

また、 m 次の cyclic multiple plane \tilde{X}^m についてiii) $\prod_{j=1}^{m-1} \phi_1(\xi_m^j) \cdots \phi_k(\xi_m^j) \neq 0$ ならば:

$$b_1(\tilde{X}^m) = 0.$$

(ξ_m は 1 の原始 m 乗根)

C の singularity が、すべて cusp である場合を考える。
 と、 $\phi_j(t) = t^2 - t + 1$ 。したがって iii) より、 $6 \mid m$
 のときは、 $b_1(\tilde{X}^m) = 0$ となる。(Zariski は、この
 結果を、linear system を用いて示している) また、同じ
 仮定の下で、 $6 \mid \deg C$ と仮定すると、

$$f_{N-2}(t) = \begin{cases} t^2 - t + 1 & \cdots \textcircled{1} \\ 1 & \cdots \textcircled{2} \end{cases}$$

① は、 $\pi_1(\mathbb{P}^2 - C)$ が non-abelian のとき② は $\pi_1(\mathbb{P}^2 - C)$ が abelian のとき、を得る。

5° 定理 1-3 の 証明の概略を述べる. 詳細は [2], [3] を 参照されたい.

定理 1 polynomial form の空間 $E(X)$ を 次のように定義する. 単体 $\sigma \subset \overline{V-N^1}$ については, σ 上の forms とは, \mathbb{Q} -polynomial forms とし, $\sigma \subset \overline{N^P-N^{P+1}}$ については,

$$\{ \mathbb{Q}\text{-polynomial forms over } \sigma \} \otimes \wedge (\theta_{i_1}, \theta_{i_2}, \dots, \theta_{i_p})$$

ここで: $\deg \theta_{i_1} = \dots = \deg \theta_{i_p} = 1$ かつ $d\theta_{i_j} = \tau_{i_j} |_{\sigma}$

(τ_{i_j} は 埋めこみ $D_{i_j} \rightarrow V$ の Thom form かつ

D_{i_1}, \dots, D_{i_p} は, σ をとる divisors)

$$W_{-j}(E(X)) = \left\{ \sum \alpha \wedge \theta_{i_1} \wedge \dots \wedge \theta_{i_t}, \begin{array}{l} \alpha \text{ は } V \text{ 上の } \mathbb{Q}\text{-polynomial} \\ \text{form } \tau, \quad t \leq j \end{array} \right\}$$

として, $E(X)$ の weight filtration を 導入する.

Step 1 1) ${}^w E_0^{-P, 8} = \text{Gr}_w^{-P}(E^{-P+8}(X)) \cong \text{res } \mathcal{E}^{8-2P}(\tilde{N}^P; \mathcal{E}_{\mathbb{Q}}^P)$

2) ${}^w E_1^{-P, 8} \cong H^{8-2P}(\tilde{D}^P; \mathcal{E}_{\mathbb{Q}}^P)$ を示す.

Step 2 スペクトル列の E_1 -term の微分 d_1 が:

\mathbb{Q} -d.g.a. A の 微分 d と 一致することを 証明する.

Step 2 については $x \in H^{g-2p}(D_{i_1} \cap \dots \cap D_{i_p})$ とし
 $[\omega] = x$ とすると

$$\begin{aligned} & d(\omega \wedge \theta_{i_1} \wedge \dots \wedge \theta_{i_p}) \\ &= d\omega + (-1)^{g-2p} \left\{ \sum_{k=1}^p \tau_{i_k} \wedge (\omega_{i_1} \wedge \dots \wedge \overset{k}{\omega_{i_p}}) \right\} \end{aligned}$$

また $[\omega \wedge \theta_{i_1} \wedge \dots \wedge \theta_{i_p}] \in W E_0^{-p, g}$ について

$$d_0[\omega \wedge \theta_{i_1} \wedge \dots \wedge \theta_{i_p}] = [d\omega \wedge \theta_{i_1} \wedge \dots \wedge \theta_{i_p}]$$

$$\begin{aligned} d_1[\omega] &= d_1[\text{res}(\omega \wedge \theta_{i_1} \wedge \dots \wedge \theta_{i_p})] \\ &= (-1)^{g-2p} \sum_{k=1}^p x \wedge \tau_{i_k} \end{aligned}$$

これによつて主張が示された。

E_1 -term からつくられる d.g.a の minimal model の構成は Morgan による。

定理 2 $\mu: (\hat{\mathbb{P}}^2, \hat{C}) \rightarrow (\mathbb{P}^2, C)$ を非特異モデルとすると $A_{\mathbb{P}^2, C}$ は次のような構造をもつ。

$H^2(\hat{\mathbb{P}}^2)$ の基底を $\alpha, \beta_1, \dots, \beta_{g-1}$ ($\beta_j^2 + \alpha^2 = 0$)

C の既約成分 C_j の proper transform \hat{C}_j について

$H^0(C_j)$ の基底を b_j

exceptional divisor E_k について

$H^0(E_k)$ の基底を e_k

また $H^1(\hat{C}_j)$ の基底を

c_{j1}, \dots, c_{j2g} ($g = \text{genus}(\hat{C}_j)$) とおく。

i) d.g.a. A は

$$\{\beta_j\}_j, \{\epsilon_R\}_R, \alpha, \{\beta_R\}, \{C_{j_1}, \dots, C_{j_{2j}}\}$$

($1 \leq R \leq l$)

によ, τ 生成される.

ii) 微分 d は, 次の式を満足する

$$d\epsilon_R = \beta_R$$

$$d\alpha = d\beta_1 = \dots = d\beta_l = 0$$

$$d\beta_j = \delta_j \alpha - m_1 \beta_1 - m_2 \beta_2 - \dots - m_l \beta_l$$

ここで, $\delta_j = \deg C_j$ で, m_j は, 無限に近い特異点における重複度.

iii) 積構造は, intersection form によ, て, 真かれる.

以上の A の構造より, 定理の主張は, 示される.

定理3 , 各特異点 p_j について, $S_j - K_j$ の d -fold cyclic covering を構成し, これを \tilde{X}_j^d とする. $H_1(\tilde{X}_j^d)$ の生成元 $[e_j], \dots, [e_j^{m_j}']$ について, これらの基本関係式と global な \tilde{X}^d に関する $H_1(\tilde{X}^d)$ の presentation を, 比較することによ, て証明される.
(詳細は [2])

References

- 1 P. Deligne, P. Griffiths, J. Morgan, D. Sullivan,
Real Homotopy theory of Kähler manifolds, Invent. math.
29 (1975), 245- 247

- 2 T. Kohno, Alexander Polynomials of Plane algebraic curves,
(preprint)

- 3 J.W. Morgan, The algebraic topology of smooth algebraic
varieties, Publ. math. I.H.E.S. (1978) 137 - 204

- 4 M. Schlessinger, J. Stasheff
Deformation theory and rational homotopy type (preprint)

- 5 D. Sullivan, Infinitesimal Computations in Topology,
Publ. math. I.H.E.S. 47 (1977) 269 - 331

- 6 O. Zariski, On the existence of algebraic functions of two
variables possessing a given branch curve, Amer. J. of
Math. 51 (1929) 305 - 328

- 7 ----- On the linear connection index of the algebraic sur
surfaces $z^n = f(x, y)$, Proc. of Nat. Acad. of Sci. 15
(1929)

- 8 ----- On the irregularity of cyclic multiple planes
Ann. of Math. 32 (1931) 485 - 511